【実践報告】

A study on the self-disclosure of supportive staff in Long-term Group Lodging Activities.

—Case study on "Nasukashi no mori Second School" —

志賀 亮太 SHIGA Ryota 国立那須甲子青少年自然の家

キーワード

長期宿泊体験活動、自己開示、学生支援スタッフ、教師志望

要旨

本研究は、長期宿泊体験活動への学生支援スタッフとしての参加が学生の自己開示にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし、なすかしの森セカンドスクールにおいて学生支援スタッフに対する「自己開示の深さを測定する尺度」を用いた質問紙調査と半構造化面接を用いた面接調査の2つの調査を行った。質問紙調査においては合計得点をはじめとしてすべての下位因子で有意な変容が認められ、面接調査では3つの具体的な自己開示に関わる場面が明らかとなった。2つの結果を通じて、セカンドスクールへの関わりが支援スタッフの自己開示に肯定的な影響を与えていることが考えられる。特に学校生活面や集団生活面、なすかしの森タイムでのプログラム実施の各場面での児童との関わりや支援スタッフ同士、職員との関わりが支援スタッフの自己開示についての考え方や行為自体にも肯定的な影響を及ぼしたと考えられる。

I. 緒言

現代社会において、少子高齢化・都市化・電子メディアの普及といった、社会の急激な変化に伴い、人間関係の希薄化などの様々な問題が表出している。こういった社会の急激な変化により表れた諸問題は、複雑に関係し合い、社会が不透明な状態になりつつある。これらに対応するために学校現場では「基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上、多様な人間関係を結んでいく力の育成等を重視する必要がある」とされている(1)。

学校現場でこれを達成するためには、教師と児童生徒の関係性が良好であることが必要であろう。教師と児童生徒の関係性については様々な研究がなされている。奈須(1986)は生徒の教師に対する評価と学業成績の原因帰属の関係から、教師に対してポジティブな評価をしている生徒は学業成績の失敗を努力不足に帰属し、実際に努力することによって、成績を改善していくことができるとしている⁽²⁾。つまり、教師に対するポジティブな評価が学業成績の向上の一助となることが考えられる。中井ら(2008)は中学生に対する調査から、生徒の教師に対する信頼感は「学習意欲」や「進路意識」などにも影響を及ぼして

いるとしている⁽³⁾。また、栗原(2011)は子どもの「生きる力」をはぐくむための教師の 重要性を述べており、この際の教師と児童生徒の間の重要となる関係性を「ふかい心の流 れ合い」としている(4)。これらのことから、教師と児童生徒の良好な関係性は学習面のみ ならず児童生徒の人格形成の面においても重要であろうことが考えられる。

教師が児童生徒との信頼関係を形成するためには様々な要素があるだろう。中井ら (2006) は生徒の教師に対する信頼感について「安心感」「不信」「正当性」の3つの下位尺 度を示した。このうちの「安心感」について、特徴として「教師との関係性に対する安心 感」があり、「私は先生の前でも自然にありのままでいられる」などの項目が挙げられてい る^⑤。また教師と児童生徒との信頼関係の形成について、教師の自己開示がこれに寄与す ることが指摘されている。自己開示とは「自分自身をあらわにする行為であり、他人たち が知覚しうるように自身を示す行為」(6)であり、教師の自己開示が生徒に与える効果につ いて、木村(2009)は(1)開かれた関係構築、(2)生徒の成長・変容促進という2つの 長期潜在的機能と(3)生徒による教師理解進展、(4)生徒への共感メッセージ伝達、(5) 生徒の心情変容、(6)生徒の学習意欲促進という4つの即時的機能が内在するとしている(*)。 上記に示した「教師との関係性に対する安心感」においても木村の示した自己開示の効果 である「開かれた関係構築」が大きく関係していることが考えられる。これらのことから、 教師にとって自己開示とは生徒との関わりにおいて重要な行為である。

上記に示した通り、教師の児童生徒に対する自己開示が重要であるとされているが、教 師を志望する学生に関して、児童生徒との関わりの中で必要となる自己開示の調査研究や 指導の実践などは少ない。

一方で、国立那須甲子青少年自然の家では授業と宿泊する場を那須甲子青少年自然の家 に設定し、長期宿泊体験活動を行う教育事業(事業名:なすかしの森セカンドスクール、 以下セカンドスクール)が行われている。この事業の特性に、教師を目指す学生が支援ス タッフとして、授業の指導補助だけでなく施設での生活補助に携わることが挙げられる。 参加した学生支援スタッフからも「普段経験のできない指導場面に関わることができてよ かった」など、肯定的な意見が多く上がっており、教師を目指す学生の指導経験の場とし ての重要性が伺える。

以上を踏まえ、本研究ではこの事業への支援スタッフとしての参加が学生の自己開示に どのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし、学生支援スタッフが指導に 深く携わることのできる長期宿泊体験活動のさらなる可能性を考究するための一助とする。

Ⅱ. 方法

1. 調査対象

平成25年度に実施されたセカンドスクール(実施は全6校12クラス)の学生支援スタ ッフ 27 名 (男性:10 名、女性:17 名) を調査対象とした。調査対象を表1に示す。表1 の KU 小学校スタッフ数については、男性も1名いたが、社会人だったため今回の対象には 含めず、よって表の人数表記もしないこととした。なお、このセカンドスクールの学生支 援スタッフについては施設近隣の大学数校へ施設職員が出向き、教職やボランティア活動 に関わる授業の中でセカンドスクールの事業説明も含め、支援スタッフの募集を行ってい る。

実施期間	実施校	学年・クラス	児童数	対象	合計		
>₹/\@7911FJ	头爬	TT ///	儿里纵	(男性)	(女性)		
9月 7日~13日	N村立O小学校	5学年3クラス	77	5	3	8	
11月10日~15日	N村立Y小学校	5学年1クラス	27	1	2	3	
	N村立KA小学校	5学年1クラス	8	1	1	2	
11月17日~22日	N村立KU小学校	5学年3クラス	73	2	7	9	
	N村立H小学校	5学年1クラス	20	0	2	2	
		6学年1クラス	14	1	2	3	
				10	17	27	

表 1 セカンドスクールの概要および対象者内訳

2. 事業内容

セカンドスクールについては、平成19年度より国立那須甲子青少年自然の家が主催・実施をしている事業である。対象は小学校第5学年を中心として、平成25年度までに延べ891名が参加している。4泊5日の長期宿泊体験活動を行う事業であり、特徴として、①宿泊だけでなく学校生活の場も施設へ移している、②学生支援スタッフが授業や施設での宿泊において直接的、間接的に指導に深く関わるという点が挙げられる。日程・プログラムの一例を図1に示す。

3. 調査及び分析方法

本研究において、被験者が限られることから統計的分析の信頼性が十分であるとは言えないため、質問紙調査で明らかとなる量的側面と併せて、面接による質的な側面からの調査も行うこととした。

(1) 質問紙調査

丹羽ら(2010)が開発した「自己開示の深さを測定する尺度」⁽⁸⁾を用いた調査を実施した。社会的浸透理論の理論的枠組みを参考にしながら想定された趣味(レベル II)、困難な経験(レベル III)、決定的ではない欠点や弱点(レベル III)、否定的性格や能力(レベル IV)の4つの下位尺度から構成された 24 項目からなる尺度である。(表 2)各項目ごとに「何も話さない」から「十分に詳しく話す」の7件法によって回答をもとめた。調査は支援スタッフ研修の前(以下、(Pre) とセカンドスクール終了後(以下、(Post) の計 (2 回実施した。

分析に関しては Js-STAR2012 を使用し、Bonferroni 法を用いた一要因被験者内における分散分析を行った。すべての結果は、平均生標準偏差で表し、有意水準は5%未満とした。

(2) 面接調査

セカンドスクール期間中の児童との関わりの中で、被験者自身および児童の自己開示が現れた場面やその時の状況など、質問紙では明らかにできない実際のセカンドスクール中の自己開示の内容について調査を行った。面接については半構造化面接法を用い、あらかじめ用意した「セカンドスクールの感想」「印象に残っている児童との関わりの具体的な場面」といった質問を中心に被験者に自由に語ってもらった。面接については筆者が被験者との二者間で、1名につき30分程度かけて行った。面接の内容は被験者の許可を得てICレコーダーに録音した。

分析に関しては面接内容から逐語録を作成し、被験者の自己開示に関して重要であると 思われる部分を抽出し、それぞれの自己開示場面の分類を行った。

報贷	21:00 22:00							
入浴	21:00							
K	20:30	7						
###	19:40 20:10	A A	大 独					
・ * * * * * * * * * * * * * * * * * * *	18:00 19:30	, L の 森	11 岩	活動計画作成	ナイトハイク肝就し	館内宝採し	キャンドル	スタシレ摩鞍
夕食	17:15 17:50	中华	夕食				(C O S +) 質問策	
(俸	17:00 17:15	\$	かくのしかこ					しゃ
(研修) ・セカンドスクールの 意義・内容 ・児童理解と接し方 ・各クラス児童の個別確認	15:00 17:00		^婦 I		作 題	など	スタッフ ふりかえり	
	15:10 15:20							
	14:20 15:05		9	棒別怪鄭	国語 (ものの見方 を広げよう)	2習の時間 できるまで」 すき 体験)	部 作り)	別れのつどい
スタッフ 質問紙 (A 11 o)	13:30 14:15	7	2	体育 (表現活動)	特別活動 (スポーツ 集会)	総合的な学習の時間 (講義 「紙ができるまで」 と実際の紙寸き体験)	国語 (俳句作り)	道徳 (ふりかえり)
	12:10 13:30	7			2			
	11:25 12:10	N 9	4	理科 (地層觀察)	図工(焼き板作り)	家庭 (トートバック作り)	家庭 (石窯ピザとダッチオーブンでのボトフ作り)	総合的な学習の時間 (大内宿・塔のへつり見学)
	10:35 11:20	1	3					
	9:30 10:15	7 2	2	国部字樂)		算数 (比例反比例)		
	8:45 9:25		1	出会いの っどい	算数 (比例反比例)	理科 (地層見学 まとめ)	算数 (比例反比例)	
	8:30 8:40		時限	スタッフ 受入準備				
	8:15		'					
(日短)		世田		1 日 日	2 H	3 日目	4 日 日	го Ш

図1 セカンドスクールの日程 (例:N村立H小学校第6学年)

表2 自己開示の深さを測定する尺度(4因子24項目)

レベル (因子)	項目
趣味【レベルⅠ】	好きなもの (音楽・映画・服装など)
	休日の過ごし方
	最近の楽しかったできごと
	最近夢中になていること
	趣味にしていること
	楽しみにしているイベント
	これから趣味としてやってみたいこと
困難な体験【レベルⅡ】	困難な状況を誰かに助けてもらった経験
	困難な状況を乗りこえるために頑張ってきたこと
	つらい経験をどのように乗りこえてきたかということ
	過去のつらい経験が現在どのように役に立っているかということ
決定的ではない欠点や弱点【レベルⅢ】	直さなければと思っているが、なかなか直らないささいな欠点
	ささいな欠点かもしれないが、ときどき落ち込んでしまうこと
	ある経験を通して「自分は少しダメだな」と思ったこと
	ささいな欠点について他者から心配された経験
	ささいな欠点について目ごろ思い悩んでいること
否定的性格や能力【レベルIV】	自分の性格のすごく嫌いなところ
	自分の性格のすごく嫌な部分が出てしまったできごと
	自分の能力についてひどく気にやんでいること
	能力不足が原因で、目標が達成できなかった経験
	能力で劣等感を抱いているところ
	能力に限界を感じて失望した経験
	自分のせいで人をひどく傷つけてしまった経験

Ⅲ. 結果

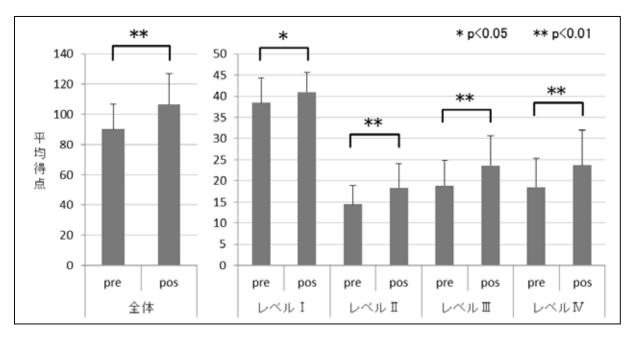
1. 質問紙調査における結果

支援スタッフの「自己開示の深さを測定する尺度」の合計得点およびその下位因子の変容を明らかにするために、Pre-Post 間を要因とした Bonferroni 法を用いた一要因被験者内における分散分析を行った。なお、下位因子の分析に関してはそれぞれの因子に属する項目の得点を合計し下位因子得点とした。結果、合計得点(F(1,26)=35.32、p<.01)において統計的に有意な結果が得られた。また、それぞれの下位因子得点は「趣味(レベルII)」(F(1,26)=6.28、p<.05)、「困難な経験(レベルII)」(F(1,26)=18.53、p<.01)、「決定的ではない欠点や弱点(レベルIII)」(F(1,26)=15.70、p<.01)、「否定的性格や能力(レベルIV)」(F(1,26)=15.73、p<.01)となっておりすべての下位因子で有意な変容がみられた(表 3、図 2)。これらのことから、セカンドスクールへ支援スタッフとして関わることが被験者の自己開示について肯定的な影響を与えたことが明らかとなった。

表3 自己開示の深さを測定する尺度の合計得点および 各因子得点の平均値と標準偏差および分析結果

	Pre	(SD)	Post	(SD)	F
合計得点	90. 14	16.48	106. 55	20.20	35. 32 **
趣味 (レベル I)	38. 44	5.82	40. 92	4. 76	6. 28 *
困難な経験(レベルⅡ)	14. 37	4.47	18. 33	5. 72	18. 53 **
決定的ではない欠点や弱点 (レベルⅢ)	18.81	5. 99	23. 59	7. 11	15.70 **
否定的性格や能力(レベルIV)	18. 51	6.77	23.70	8. 27	15.73 **

* p<0.05 ** p<0.01



合計得点および各因子得点の平均値と標準偏差

2. 面接調査における事例紹介

(1) T.W さん(女性/大学2年生/H 小学校6学年担当)

子どもたちとの関わりの中での自己開示については「A くん、ぼーっとした感じの、体 格のいい子が私の班にいて、一緒にいて、最初は話しかけても目も合わせてくれなかった のが、最終日が近付くにつれて、大きな声で自己主張とかしてくれるようになって」と述 べ、自分との対話の中でその子が変わってくれたことが非常に印象に残っているようだっ た。また別の場面で「裁縫のとき、Aくんが針を刺す方向がわからなくて、そのときに『私 も小さいころできなくてお母さんに怒られたし、人に当たったら危ないし…』ということ があったよって話をした。勉強のとき、自分の過去の経験を話した」と述べており、A く んと共通した過去の経験をもとに自己開示を行っていたようである。

(2) K.S さん (男性/大学3年生/H小学校6学年担当)

セカンドスクール中の自己開示については「イメージするのはお風呂場。昔の手術の痕 があって、でもそれは全然トラウマとかでもないので、『それなに~?』と聞かれてそれに 答えて距離が近づいていくと思う。できるだけそういう風にしようと思っていた」と述べ ていた。その自己開示に対しては「話題作り、コミュニケーションのきっかけ作りとして 考えていた」といい、「無言のとき、何話そうとなったとき、『自分はこうだったけど君は どう?』というような形でやっていた。(中略) ただ気を付けることとして、それを出すこ とで相手が傷ついてしまうこと、例えば親がいないとか、それは気を付けるようにしてい た」とし、またセカンドスクールを通して「これ(自己開示)が必要なんだなと改めて実 感した」と述べていた。

(3) H.S さん(女性/大学3年生/H小学校5学年担当)

セカンドスクールについては「始まる前まではプレッシャーだったけど、始まったら大 丈夫だったし、そんなことを考える暇はなかった」と述べていた。キャンプファイヤーで は進行役も務め、「いろんなことにチャレンジできたのも周りのスタッフのおかげ」だと感 想を述べていた。進行役を行ったキャンプファイヤーでの子どもたちからの一言発表が非常に印象的に感じたと言い、「キャンプファイヤーで一人一言話すときに、スタッフの中で『急に言われてもできないのでは?』という話になって、支援スタッフで例を出した。そのとき言ったのは『親切にしてもらったこと』や『自分の夢だった』それで実際キャンプファイヤーをやったら、子どもたちが自分の夢や友達についてのことを話していて…」と述べていた。H.S さんにとってもそれはスタッフの自己開示が子どもたちの自己開示を促したのではないかとの感想を持っていた。

Ⅳ. 考察

1. 質問紙調査

前述した通り、質問紙調査では合計得点およびその他の下位因子において有意な結果が得られた。このことからセカンドスクールに学生支援スタッフとして関わることが被験者の自己開示について肯定的な影響を与えたことが明らかとなった。本調査で用いた「自己開示の深さを測定する尺度」については、下位因子が自己開示の深まりに応じてレベル \mathbf{I} ~レベル \mathbf{I} 歌まで分けられているが、その下位因子すべてにおいて有意な結果が示されていることから、自身の自己開示という行為がセカンドスクールで様々な経験を経る中で育まれていったことが伺える。

セカンドスクール中に支援スタッフの自己開示に影響を与える大きな要因として、児童 との関わりが挙げられる。筆者からも初対面の児童と4泊5日の事業で寝食を共にしなが ら関係性を深めていく姿が多く見られた。榎本(1997)は自己開示相手が親密であるほど 自己開示しやすくなることを示しており⁽⁹⁾、支援スタッフの自己開示の肯定的な変化も児 童との関係性が深まり、自己開示しやすい環境になったことが影響していると考えられる。 また、セカンドスクールは児童にとってはもちろん、支援スタッフにとっても日常の大 学生活とは異なった環境であり、児童への対応やプログラムの企画などで、精神的にも非 常に負荷のかかるものである。基本的には児童に対する指導とともに、毎日の振り返り(自 然の家職員と学生支援スタッフによる)等において常に指導面での反省やプログラムの計 画などを行っている。支援スタッフにとっては児童への指導の場であると同時に自己の経 験や知識を高める場であるとも考えられる。このことは支援スタッフの感想⁽¹⁰⁾からも明ら かである。精神的健康(抑うつや充実感)と自己開示の関係性も指摘されている(11)ことか ら、こういった精神的な負荷への対応として意識的または無意識的に自己開示が促された ことが考えられる。また、福岡(2007)は大学生への調査の結果から、体験した状況のス トレス度が高いほど、その経験を開示するとしている⁽¹²⁾。本調査でも深い自己開示のレベ ル (レベルⅢ:決定的ではない欠点や弱点、レベルIV:否定的性格や能力)においてより 有意な変容がみられたが、前述のとおりの慣れない指導やプログラム運営の中で起こる 様々な失敗や悩みと、これを相談できる職員との振り返りなどがこの変容に影響したと考 えられる。

2. 面接調查

では具体的にセカンドスクール中のどのような環境や場面がこのような結果を得る要因となったのであろうか。面接調査の結果より、自己開示を実感したり、気づきを得たり

するいくつかの象徴的な場面が挙げられた。

まず事例①では「自らの経験をもとに児童への指導を促す」場面があった。木村(2009) は教師の授業内容の抽象的説明を具体化するための自己開示が生徒の授業理解と学習の足 場掛けとなる可能性があることを示唆しており⁽⁷⁾、今回のこの事例に関しては支援スタッ フが自身の過去の体験を自己開示することで、よりわかりやすく児童に自分の意図した内 容を伝えようとしたことから、それを実践していたと考えられる。次に事例②では「コミ ュニケーションのきっかけを作る」場面があった。二者間の関係を構築する上で自己開示 を行いながら関係性が親密化しそれに伴い自己開示の「幅」と「深さ」も増大していくこ とを仮定している社会的浸透理論(Altman&Taylor, 1973)の考え方に基づく自己開示の大 きな機能の一つである。注目すべき点として被験者の K.S さんは「相手を傷つけることは 言わないよう注意する」という点である。周囲の環境や相手のことを考えて、自らの自己 開示を選択しているという点において、自己開示を関係形成の手段として計画的に行って いることがわかる。最後に事例③では「自らの自己開示をきっかけとして児童の健全な自 己開示を引き出す」場面があった。牟田(1996)は教師と児童の相互の自己開示について、 教師が自身について話してくれていると認識する児童は、教師に対して自分のことを話す と言えるとしている(13)。本事例について、発表した児童たちがどんなきっかけで将来の夢 など自己のアイデンティティに関わる部分まで話したかはわからないが、少なくとも S.H さんの中ではスタッフの事前の発表が肯定的に作用されたと実感しているようである。

V. 結論

本研究では、学生のセカンドスクールへの支援スタッフとしての参加が学生の自己開示 にどのような影響を与えるのかを明らかにすることを目的とし、質問紙調査と面接調査の 両面から調査を行った。質問紙調査においては合計得点をはじめとしてすべての下位因子 で有意な変容が得られ、面接調査では3つの具体的な自己開示に関わる場面が明らかとな った。2つの調査結果を通じて、セカンドスクールへの関わりが支援スタッフの自己開示 に肯定的な影響を与えていることが考えられた。特に学校生活面(授業中の直接的・間接 的な児童場面など)や自然の家での集団生活面(空いた時間の他愛もない会話の場面など)、 なすかしの森タイムでのプログラム実施(支援スタッフによるプログラム進行場面など) の各場面での児童との関わりや支援スタッフ同士、職員との関わりが支援スタッフの自己 開示についての考え方や行為自体にも肯定的な影響を及ぼしたと考えられる。

なお、本研究の限界として、被験者が27名と限られていることから統計的分析の信頼性 が十分であるとは言えない。今後の課題としては、調査対象者が支援スタッフのみだった ことから、支援スタッフの自己開示が児童にとってどのように作用しているのかが明らか にできないことが挙げられる。支援スタッフの自己開示を児童がどのように感じたかを明 らかにすることで、自己開示を通じた支援スタッフと児童の関係が明確となり、児童の視 点に立った支援スタッフへの指導・助言の一助となることが考えられる。また、今回は対 象となる事業が国立那須甲子青少年自然の家のセカンドスクールのみであったが、国立青 少年教育施設で行われている同様の通学型のキャンプにおいても調査を行い、長期宿泊体 験活動の効果・作用の多様性を考究するため、プログラムや日程等の違いとその効果の差 などを明らかにすることが必要になると考えられる。

引用文献、参考文献、注

- (1) 中央教育審議会、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」(答申)、 2012
- (2) 奈須正裕、「生徒の対教師評価が学業成績の原因帰属に及ぼす影響」、日本教育心理学会総会発表論 文集、第28号、1986、pp.746-747
- (3) 中井大介・庄司一子、「中学生の教師に対する信頼感と学校適応感との関連」、教育心理学研究、第 57 巻第1号、2009、pp. 49-61
- (4) 栗原輝雄、「子どもの「生きる力」をはぐくむ教師の「聴く力」 発達支援・教育(保育)における意義-」、鈴鹿国際大学紀要 Campana、第 17 巻、2011、pp. 13-24
- (5) 中井大介・庄司一子、「中学生の教師に対する信頼感とその規定要因」、教育心理学研究、第 54 巻 第 4 号、2006、pp. 453-463
- (6) Jourard, S. M., "The transparent self", 1971
- (7) 木村優、「中学校教師が生徒に対して行う自己開示」、教育學研究、第76巻第1号、2009、pp.33-43
- (8) 丹羽空・丸野俊一、「自己開示の深さを測定する尺度の開発」、パーソナリティ研究、第 18 巻第 3 号、2010、pp. 196-209
- (9) 榎本博明、「自己開示の心理学研究」、北大路書房、1997
- (10) 国立那須甲子青少年自然の家、「平成 25 年度教育事業なすかしの森セカンドスクール報告書」、(作成中)
- (11) 石本雄真・楠見菜都子・齊藤誠一、「大学生の自己開示と精神的健康との関連-自己開示の量的側面と質的側面に注目して-」、日本青年心理学会大会発表論文集、第18巻、2010、pp. 26-27
- (12) 福岡欣治、「日常ストレスの状況での友人への自己開示とソーシャル・サポート(3) 開示に対する友人からのサポートと気分状態の改善-」、静岡文化芸術大学研究紀要、第8巻、2007、pp. 25-30
- (13) 牟田卓生、「教師と児童、相互の自己開示に関する研究」、日本教育心理学会総会発表論文集、第 38巻、1996、pp.318